



特産果樹生産情報第4号
(7月4日～7月31日)

平成27年7月3日発表
青森県「攻めの農林水産業」推進本部

**ぶどうの薬剤散布は1回追加！
おうとう、うめ、あんずは適期収穫と収穫後防除の徹底を！
西洋なし、ももはシンクイムシ類防除の徹底を!!**

I 要 約

- ぶどうは生育が早まり、例年の防除計画では散布間隔が開きすぎるので、「大豆粒大（7月中旬頃）」の薬剤散布を「大豆粒大」と「7月中旬」の2回に分けて行う。
- おうとうは晩生種の適期収穫に努める。また、褐色せん孔病が発生すると早期落葉するので、収穫後の防除を必ず行う。
- 西洋なしは輪紋病防除のため、10日間隔の薬剤散布を厳守する。
- もものせん孔細菌病対策では、新梢に発生する夏型枝病斑は伝染源になるので、見つけ次第、速やかに切り取って処分する。
- うめ・あんずは適期収穫に努める。また環紋葉枯病が発生すると早期落葉するので、収穫後の防除を必ず行う。
- 西洋なし、ももはシンクイムシ類の防除対策を徹底する。

II 生産情報

1 生育概況

露地ぶどうの落花日は、五戸（りんご研究所県南果樹部）のキャンベル・アーリーでは平年より15日早く、黒石（りんご研究所）のスチューベンでは5日早かった。無加温ハウスぶどうのキャンベル・アーリーの落花日は、五戸では平年より7日早く、三戸（県生育観測ほ）では5日早かった。

おうとうの収穫適期は平年より早く、南部町では6月10日頃から佐藤錦の収穫が始まった。

6月30日現在、西洋なし、ももの果実肥大は平年を上回っている。

露地ぶどうの生育ステージ

（りんご研究所）

品 種 地 域	年	キャンベル・アーリー	スチューベン	
		五戸	五戸	黒石
開 花 日	本 年	6. 8	6. 11	6. 8
	平 年	6. 22	6. 25	6. 20
	前 年	6. 8	6. 16	6. 11
満 開 日	本 年	6. 10	6. 14	6. 11
	平 年	6. 25	6. 28	6. 22
	前 年	6. 11	6. 19	6. 13
落 花 日	本 年	6. 14	6. 20	6. 25
	平 年	6. 29	7. 4	6. 30
	前 年	6. 16	6. 25	6. 24

注) 五戸の平年値：露地栽培は平成7年～平成26年（20年間）の平均
黒石の平年値：平成12年～平成26年（15年間）の平均

キャンベル・アーリー（無加温ハウス）の生育ステージ

（6月30日現在、りんご研究所県南果樹部、県生観ほ）

品 種 地 域	年	キャンベル・アーリー	
		五 戸	三 戸
被覆月日	本 年	3.26	3.17
	平 年	3.22	(3.14)
	前 年	3.24	3.19
開 花 日	本 年	5.23	5. 8
	平 年	5.29	5.13
	前 年	5.23	5.12
満 開 日	本 年	5.24	5.11
	平 年	5.31	5.16
	前 年	5.26	5.14
落 花 日	本 年	5.30	5.14
	平 年	6. 6	5.19
	前 年	6. 1	5.17
着 色 日	本 年		
	平 年	8. 1	7.15
	前 年	7.27	7. 7

注) キャンベル・アーリーの五戸は過去10年間の平均値、三戸は平成3年を除いた過去24年間の平均値、() 内は過去13年間の平均値

西洋なし、ももの果実肥大

（6月30日現在、横径cm、%）

地 域	樹 種 (品 種)	本 年	平 年	前 年	平年比
五 戸 (県南果樹部)	西洋なし(ゼネラル・レクラーク)	4.2	3.2	3.9	131
	も も (あかつき)	4.2	3.6	4.1	117

注) 平年値：平成7年～平成26年（20年間）の平均

ももの横径は、縫合線を挟んで測定した最大径である。

2 作業の重点

(1) ぶどう

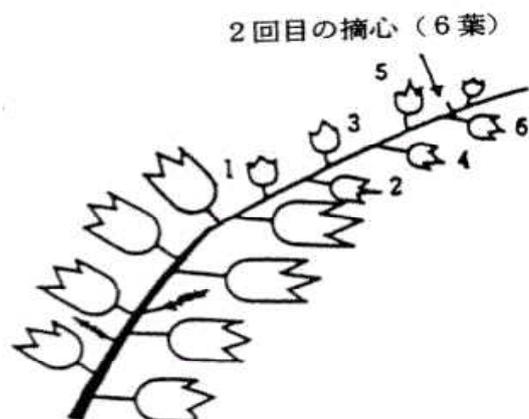
ア 露地栽培

(ア) 副梢の誘引、結束

薬剤や日光のとおりをよくするため、新梢は随時角度や間隔を調整しながら架線に誘引、結束を行う。

(イ) 摘心（2回目）

摘心時期は副梢の展葉枚数が8～9枚になった頃で、1回目の摘心後に伸びた副梢は5～6葉残して摘心する。副々梢は摘心部位の先端のみ残して、他はすべて摘除する。これ以降も副々梢が伸びる場合は3～5葉で摘心を行う。



スチューベン、サニールージュ、シャインマスカットの摘心（2回目）



キャンベル・アーリー、ポートランド、ナイアガラ摘心（2回目）

(ウ) 摘房

摘房は早めに行うほど養分の浪費が少なく、その効果も大きいですが、キャンベル・アーリーは花振るいしやすいので、結実し果房の形が概ね決まってから行う。

キャンベル・アーリー、バッファロー（アーリースチューベン）及びサニールージュの着房数の目安は次のとおりである。

- 葉数13枚以下で伸びの止まっている結果枝：原則としてすべて摘房
- 葉数14～18枚の結果枝：1果房
- 葉数20枚前後の結果枝：1～2果房
- 葉数25枚以上の結果枝：2果房

シャインマスカットやルビーオクヤマなど大粒種は、1結果枝に1果房とする。

(エ) 摘粒

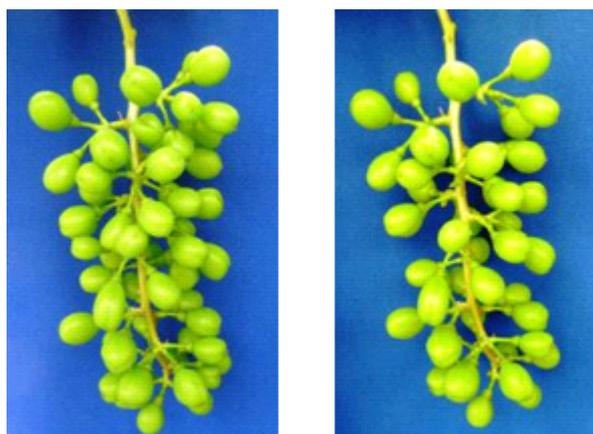
摘粒は、粒数や果房の大きさを制限することにより、果房の品質を向上させるほか、密着型の品種では裂果の防止にもなる。

実施時期は実止まり、果実の大きさが小豆大の頃（満開後15～25日）から始め、果粒軟化期前（8月上旬頃）には終えるようにする。シャインマスカットは大豆粒大（7mm程度）頃までに終えるようにする。

品種別の摘粒の目安は下表のとおりである。小粒果やさび果などの障害果のほか、果粒が外向きに並ぶように内側の果粒を除去し、目安の果粒数にする。

品種別目標果房重と果粒数（摘粒の目安）

品 種	果房重 (g)	果粒数 (粒)	1粒重 (g)
スチューベン	300	70～80	4.0
キャンベル・アーリー	300	50～60	5.5
サニールージュ	350	50～60	6.0
ポートランド	250	60～70	4.0
ナイアガラ	250	60～70	4.0
シャインマスカット	450	40～50	10.0



シャインマスカットの摘粒前後の果房
(左：摘粒前（61粒）、右：摘粒後（45粒）)

(オ) シャインマスカットの被袋

無袋栽培では「かすり症」による品質低下が問題となるので、有袋栽培を行う。被袋は摘粒を終えてから、果粒軟化期頃（例年は7月下旬～8月上旬）に行い、収穫時まではずさない。また、被袋前には薬剤防除を必ず行う。高温時の被袋は日焼けを助長する場合があるので、気温が30℃を超える極端に高温な日や時間帯には被袋しない。

イ 無加温ハウス栽培

(ア) ハウスの温度管理

ハウス内が高温になると果実の日焼けなど高温障害の発生が懸念されるので、ハウスのサイド、妻及び屋根の谷間を巻き上げるなどして換気する。

(イ) シャインマスカットの被袋

露地栽培に準じる。

(ウ) 収穫

収穫は品種特有の着色を示し、芳香を放ち、食味も良くなり固有の風味に達してから行う。キャンベル・アーリーはよく着色するため、低糖度の果房や未熟果が収穫されがちなので、果皮色が紫黒となり、果粉に覆われ品種特有の食味に達してから収穫する。

収穫時の糖度は、屈折糖度計でキャンベル・アーリーでは14%、バッファロー（アーリースチューベン）及びサニールージュでは17%を目安とする。

ウ 追肥（地力の低い園地のみ）

砂礫質の沖積土壌や火山灰土壌などの地力の低い園地では、7月上旬の果粒肥大期に全施用量の10%を施用する。施用量は10 a 当たり窒素1.5kg、リン酸1.0kg、カリ1.0kgを目安として施用するが、樹勢によって加減する。

エ 病虫害防除

(ア) 薬剤散布

本年は生育が早く進んでおり、例年どおりの計画で薬剤散布すると、散布間隔が開きすぎる。そこで、例年の「大豆粒大（7月中旬頃）」を「大豆粒大」と「7月中旬」の2回に分けて薬剤散布を行う。なお、薬剤の年間使用回数には十分注意する。

キャンベル・アーリー及びスチューベン基準

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10 a
大豆粒大	ジマンダイセン水和剤 1,000倍	害虫の発生に合わせて、 アグロリン水和剤 2,000倍 又はアディオンフロアブル 1,500倍	2500
7月中旬	アミスター-10フロアブル 1,000倍 又はストロベートドライフロアブル 2,000倍 又はホライズントドライフロアブル 2,500倍	のいずれかを選択する。	2500

注) 1 「大豆粒大」以降、展着剤は使用しない。

2 ジマンダイセン水和剤（有効成分：マンゼブ）の年間使用回数は「2回以内」である。また、散布時期が遅れると果面汚染の懸念があるので、「大豆粒大」までに散布する。

3 アグロスリン水和剤及びアディオフロアブルの年間使用回数は、いずれも「5回以内」である。

(イ) 晩腐病対策

発病果粒や発病果房は見つけ次第摘み取って、土中深く埋めるなどの処分をする。園地内の排水や通風を良くし、過湿にならないようにする。

スチューベンで発生が多い園地では、「小豆粒大」にベンレート水和剤3,000倍を特別散布する。

(ウ) ベと病対策（スチューベン対象）

軟弱な生育を避けるために、窒素肥料を施用し過ぎない。発病葉や発病果房は見つけ次第、摘み取って処分する。排水不良園では、排水溝を掘って、雨水が長く溜まらないようにする。

(エ) 灰色かび病対策

新梢の摘心や誘引を適切に行い、園地内の通風を良くする。発病葉、発病果及び発病枝はできるだけ早く取り除き、土中に深く埋めるなどの処分をし、他へ伝染しないようにする。ハウス栽培では室内の換気に努め、過湿にしない。

(オ) ハダニ類対策（スチューベン）

発生状況に応じて、マイトコーネフロアブル1,000倍又はカネマイトフロアブル1,000倍を特別散布する。ただし、マイトコーネフロアブル及びカネマイトフロアブルは、8月以降の散布は果面汚染のおそれがあるので注意する。

(カ) コガネムシ類対策

成虫は捕殺する。

「7月下旬」に発生が見られる場合は、アグロスリン水和剤2,000倍、アディオフロアブル1,500倍又はスミチオン水和剤40 800倍のいずれかを特別散布する。

(2) おうとう

ア 晩生種の収穫

収穫は、なるべく朝や夕方の涼しい時間帯に行うが、日中の高温時に収穫する時は、収穫後直ちに冷涼な日陰に置いて果実温を下げ、鮮度を保つ。

収穫が遅れるとショウジョウバエ類の発生やうるみ果が出やすいので、適期収穫に努めるとともに被害果は除く。

イ 追肥（礼肥）

樹勢回復と花芽分化促進のために、収穫後の7月中旬に全施肥量の20%を施

用する。施用量は、成木で10 a 当たり窒素3.0kg、リン酸1.2kg、カリ2.4kgを目安とするが、土壌条件や樹勢によって加減する。

ウ 雨よけ被覆資材の除去

収穫が終わったらできるだけ早く被覆資材を除去する。

エ 病害虫防除

(ア) 薬剤散布

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10 a
収穫後	オーソサイド水和剤80 800倍 又はオキシラン水和剤 600倍 又はチウラム水和剤 500倍 〔チオノックフロアブル トレノックスフロアブル〕	スプラサイド水和剤1,500倍	5000

(イ) 灰星病対策

実腐れは見つけ次第、摘み取って土中深く埋めるなどの処分をする。

南陽やサミットなどの晩生種では、「収穫前」にアミスター10フロアブル1,000倍又はナリアWDG2,000倍を特別散布する。

(ウ) 褐色せん孔病対策

多発すると早期に落葉するので、「収穫後」の薬剤散布は必ず行う。

(エ) ショウジョウバエ類対策

被害果や取り残し果実はショウジョウバエ類の発生源となり、園内密度が上昇するので、速やかに処分する。

発生が懸念される場合は、晩生種の収穫前にテルスターフロアブル4,000倍又はスカウトフロアブル3,000倍を特別散布する。なお、テルスターフロアブル及びスカウトフロアブルの年間使用回数は、いずれも「2回以内」である。

(オ) ハダニ類対策

発生が多い場合は、「収穫後」にバロックフロアブル2,000倍、カネマイトフロアブル1,000倍、コロマイト乳剤1,000倍、マイトコーネフロアブル1,000倍、ダニサラバフロアブル1,000倍、ダニゲッターフロアブル2,000倍、スターマイトフロアブル2,000倍のいずれかを散布する。

(カ) カメムシ類対策

8月上旬まで断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので、卵塊を見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫が見られたら、分散する前に捕殺する。

(3) な し

ア 徒長枝の整理

徒長枝は、将来、結実枝として使用するもの以外は、早めに剪去する。徒長枝を切る際には、高切りせずに、枝の基部からきれいに剪去する。

イ 病虫害防除（西洋なし）

(ア) 薬剤散布

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10 a
7月上旬	ストロベートドライフロアブル 2,000倍 又はナリアWDG 2,000倍	ダイジノン水和剤34 1,000倍 又はダーズバンDF 3,000倍	4500
7月中旬	オキシラン水和剤 500倍 又はキャプレート水和剤 600倍	スカウトフロアブル 2,000倍 又はテルスター水和剤 1,000倍 又はダイジノン水和剤34 1,000倍	4500
7月下旬	ストロベートドライフロアブル 2,000倍 又はナリアWDG 2,000倍 又はバルクト水和剤 1,000倍	ダーズバンDF 3,000倍 又はスカウトフロアブル 2,000倍	4500

注) ストロビルリン単剤のストロベードライフロアブル及び同じ系統の混合剤であるナリアWDGは、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。

(イ) 輪紋病対策

6～7月の幼果期は最も感染しやすいので、10日間隔の薬剤散布を守る。
なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、事前散布する。

(ウ) 胴枯病対策

主幹や主枝など大枝の病患部は見つけ次第、削り取ってトップジンMペースト又はバッチレートを塗布する。小黒点病斑が形成されている枝や枯死した枝は見つけ次第、切り取って処分し、切り口にバッチレートを塗布する。

(エ) シンクイムシ類対策

幼虫が脱出する前に被害果を採取し、7日間以上水に漬けるか、穴を掘り10cm以上の土をかぶせて埋める。被害果をそのまま放置すると次世代の発生源となるので、必ず処分する。

(オ) カメムシ類対策

8月上旬まで断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので、卵塊を見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫が見られたら、分散する前に捕殺する。

発生が見られた場合は、MR. ジョーカー水和剤2,000倍を特別散布する。

なお、「7月中旬」に発生が見られたときは、テルスター水和剤を選択するか、スカウトフロアブルを1,500倍で使用する。また、「7月下旬」に発生

が見られたときは、スカウトフロアブルを1,500倍で使用する。「7月中旬」、
「7月下旬」にスカウトフロアブル1,500倍を散布すると、その時期のシンク
タイムシ類対策の防除剤は必要ない。

(カ) ハダニ類対策

発生状況に応じて、サンマイト水和剤1,500倍、ダニトロンフロアブル
1,000倍、ダニゲッターフロアブル2,000倍、スターマイトフロアブル2,000
倍、ダニサラバフロアブル1,000倍、マイトコーネフロアブル1,000倍、カネ
マイトフロアブル1,000倍のいずれかを使用する。

ただし、リンゴハダニの多い園地では、マイトコーネフロアブル及びカネ
マイトフロアブルを使用しない。ナミハダニの多い園地では、サンマイト水
和剤を使用しない。

ダニゲッターフロアブル及びスターマイトフロアブルは7月中旬以降に使用
する。

(4) も も

ア 見直し(修正)摘果

硬核期が終了し、果実肥大に差が見られる満開70日後以降(7月中旬頃から)、
変形果や病害虫の被害果、品質不良果などを随時摘果する。また、新梢伸長や
葉色を観察し、樹勢が弱いと判断された場合も摘果する。

イ 摘葉

ももは果実に直接光線が当たらないと着色しにくいので、摘葉を行う前には、
十分な新梢管理や支柱立て、枝の吊り上げなどを行ってから、果実に触れてい
る葉を数枚摘み取る。摘み取り過ぎると、外観や品質の低下を招くので注意す
る。

ウ 除袋と着色手入れ

除袋の適期は概ね収穫の10~14日前頃である。除袋時期が早過ぎるとくすん
だ赤色となり、収穫までの日数がかかる。遅過ぎると着色が不十分なうちに収
穫期を迎えてしまう。目安としては、果実が品種本来の大きさになり、果皮が
全体的に白みがかかり地色が5~6割抜けた(果梗部と縫合線周辺に青みが残る)
頃とする。ただし、天候不順が予想される場合は除袋時期を2~3日早める。
除袋後は果実に直接かぶさっている葉を摘み取る。

エ 病虫害防除

(ア) 薬剤散布

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10 a
7月上旬	ダコニール1000 1,000倍 又はバルコートフロアブル 2,000倍	バイスロイドEW 2,000倍 又はアグロシリン水和剤 1,000倍	4000
7月中旬	ダコニール1000 1,000倍	ジノテフラン水溶剤2,000倍 〔スタークル顆粒水溶剤 アルバリン顆粒水溶剤〕 又はサムコルフロアブル10 5,000倍	4000
7月下旬	ダコニール1000 1,000倍 又はバルコートフロアブル 2,000倍	ダイジノン水和剤34 1,000倍 又はモスピラン顆粒水溶剤 4,000倍 又はダントツ水溶剤 2,000倍 又はサムコルフロアブル10 5,000倍	4000

(イ) せん孔細菌病対策

6～8月に新梢に発生する夏型枝病斑は重要な伝染源になるので、速やかに枝ごと切り取って処分する。風を強く受ける地帯で多発するので、防風網の設置などの耕種的対策も合わせて行う。



せん孔細菌病（夏型枝病斑）

(ウ) シンクイムシ類対策

幼虫が脱出する前に被害果を採取し、7日間以上水に漬けるか、穴を掘り10cm以上の土をかぶせて埋める。被害果をそのまま放置すると次世代の発生源となるので、必ず処分する。

(エ) ハダニ類対策

不要な徒長枝は早めに剪去する。発生状況に応じて、カネマイトフロアブル1,000倍、ダニゲッターフロアブル2,000倍、スターマイトフロアブル2,000倍、マイトコーネフロアブル1,000倍、ダニサラバフロアブル1,000倍のいずれかを使用する。

(オ) カメムシ類対策

8月上旬まで断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので、卵塊は見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫がみられたら、分散する前に捕殺する。

発生が見られる園地では、基準薬剤の中から「7月中旬」はジノテフラン水溶剤を、「7月下旬」はダントツ水溶剤を選択する。なお、「7月上旬」にシンクイムシ類対策でアグロスリン水和剤を選択すると、その時期のカメムシ類対策の防除剤は必要ない。

(5) うめ・あんず

ア 収穫

(ア) うめ

梅漬け用は果面の地色が僅かに抜けて、やや白みを帯びた頃である。梅酒用はこれより2～3日早めのまだ青いうちに収穫する。

(イ) あんず

果梗部の色が薄れて黄色に変わり始めた頃（果実がまだ軟らかくならないうちに）が適期である。また、収穫適期の期間が短いので、適期を逃さず、速やかに収穫を行う。

イ 追肥

追肥（礼肥）は収穫後に全施肥量の20%を施用する。施用量は、成木で10 a 当たり窒素2.8kg、リン酸1.2kg、カリ2.0kgを目安として施用するが、土壌条件や樹勢によって加減する。

ウ 病虫害防除

(ア) 薬剤散布

散布時期	殺菌剤	殺虫剤	散布量 /10 a
収穫後 (7月下旬～ 8月上旬)	トップジンM水和剤 1,500倍 又はストロベードライフロアブル 2,000倍 又はロブテール水和剤 1,500倍	—————	3500

(イ) 環紋葉枯病対策

「収穫後」の薬剤散布は必ず実施する。

(ウ) あんずの灰星病対策

被害枝は見つけ次第、切り取って処分する。発病果は見つけ次第、摘み取って処分する。

あんずでは灰星病が発生しやすいので、収穫前にオーシャイン水和剤3,000倍を特別散布する。

